

論文番号 29

担当

滋賀医科大学 福祉保健医学講座

題名 (原題/訳)

Alcohol intake and the risk of coronary heart disease mortality in persons with older-onset diabetes mellitus

アルコール摂取と非若年発症の糖尿病患者における冠状動脈疾患死亡

執筆者

Valmadrid CT, Klein R, Moss SE, et al.

掲載誌 (番号又は発行年月日)

JAMA 1999; 282: 239-246

キーワード

アルコール摂取、糖尿病、冠状動脈疾患

要旨

背景

適量のアルコール摂取が糖尿病患者の冠状動脈疾患を予防するために有益であることが、栄養調査による情報やガイドラインで指摘されているが、糖尿病患者における飲酒と冠状動脈疾患の関連を検討した成績は少ない。本研究では非若年発症の糖尿病患者を対象として飲酒と冠状動脈疾患の関連を検討した。

対象と方法

The Wisconsin Epidemiologic Study of Diabetic Retinopathy (WESDR)は、1980年にウィスコンシン州の457人のプライマリケア医によって収集された10,135症例から選ばれた2,990人を追跡する疫学研究である。このサンプルは若年発症(30歳未満)の1,210例と非若年発症(30歳以上)の1,780例で構成されている。本研究ではWESDRの非若年発症糖尿病患者のうち、ベースラインとした1984年~1986年のアルコール摂取状況を含む調査を受診した983名を1996年まで、12.3年間追跡した。飲酒習慣は、非飲酒者(never drinkers)、禁酒者(former drinkers)、アルコール2g/day未満、2-13g/day、14-28g/day、28g/day以上に分類して、冠状動脈疾患死亡との関連をみた。

結果

追跡期間中に198人の冠状動脈疾患死亡を確認し(急性心筋梗塞はこのうち100人)、冠状動脈疾患死亡率は28.3/1,000人年であった。非飲酒者の冠状動脈疾患死亡率は43.9、禁酒者は38.5であり、飲酒者では、2g/day未満、2-13g/day、14-28g/day、28g/dayのそれぞれで、25.3、20.8、9.8、10.4であった。14-28g/day、28g/dayの飲酒区分は人数が少なく死亡率も似通っているため、以後、14g/day以上として両群を一括して解析することとした。年齢、喫煙、冠状動脈疾患既往歴、糖尿病の重症度を表す検査値等を調整した際の、相対危険度は、非飲酒者を基準群(1.00)とした場合、禁酒群で0.69(95%CI 0.43-1.12)、2g/day未満群で0.54(0.33-0.90)、2-13g/day群で0.44(0.23-0.84)、14g/day以上群で0.21(0.09-0.48)であった。この結果は高血圧などの血中脂質を除く他の危険因子を調整してもほぼ同様であった。また対象集団を冠状動脈疾患既往歴のある704人と既往歴のない262人に分けて、それぞれの中で同様の解析を行ったが結果は同様であった。更に血中脂質データを有する451人で同様の解析を行うと、HDLコレステロール、総コレステロール、総コレステロール/HDLコレステロール比のいずれを調整変数として加えても、飲酒と冠状動脈疾患の関連は同様であった。また1990~1992年の飲酒量をベースラインとして計算しても結果は同様であった。

結論

本研究の結果は、非若年発症糖尿病患者において、飲酒は冠状動脈疾患による死亡率の減少に、全面的に有益な効果があることを示している。